慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	もうひとつの忠臣蔵 : 四谷怪談考
Sub Title	Another "Chushingura" : The Yotsuya ghost story
Author	仲井, 幸二郎(Nakai, Kojiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1958
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.8, (1958. 10) ,p.32- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00080001-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

もうひとつの忠臣藏

——四谷怪談考——

仲井幸二郎

忠臣藏の世界

南北の「東海道四谷怪談」初演は文政八年七月（一八二五）の中村座だつた。この初演の際は「假名手本忠臣藏」十一段の通しと共に、二日續きで上演してゐる。

「四谷怪談」はつぎのやうな五幕から成立つてゐる。卽ち、

序幕　淺草觀音境内の場　宅悅住居の場　淺草裏田圃の場

二幕　伊右衞門浪宅の場　伊藤喜兵衞内の場

三幕　砂村隱亡堀の場

四幕　深川三角屋敷の場　佛孫兵衞内の場

大詰　夢の場　蛇山庵室の場

初演の時は、初日に「忠臣藏」の大序から六段目までと、「四谷怪談」三幕目隱亡堀の場までを出し、後日（二日目）は「忠臣藏」

の七段目以下と「四谷怪談」四、五幕（隱亡堀は兩日とも演じられたとも言ふ）を上演し、終りに「忠臣藏」の討入を置くといふ風に二日がかりで二つの狂言を見せるといふことをした。

「四谷怪談」といへば、お岩の怨靈を主とした芝居である。四谷左門町に住む同心田宮又左衞門の娘お岩が、嫉妬のために身を殺し、その怨靈が夫を惱ませたといふ巷談が骨組みになつてゐると傳へられてゐるものである。事實、お岩の怨靈がいくつかの幕に出、夫民谷伊右衞門やその緣者たちを惱ます。そして、觀客は、その怪異さや、戸板返しをはじめとする舞臺の仕掛、役者の早替りなどに興味をそゝられ、お岩の芝居としての「四谷怪談」を受取つてゐるのであるが、芝居全體から感じられるものは、必ずしもさうでなく、「四谷怪談」にはもつと他に發展すべくしてしなかつた大きな筋が片隅に押しやられてをり、むしろ、その惠まれざる方の筋に、作者の並々ならぬ野心が感じとれるやうに思はれる。作者のその構想は、お岩の筋があまりにも臺本上に發展してしまつたため、遂に首尾一貫することなく、むしろなくもがなと思はせる程度のものになつてしまつたのだ。その惠まれなかつた筋——それが忠臣藏の世界であつた。

南北と忠臣藏

「四谷怪談」は世界を忠臣藏へもつてきてをり、鹽冶の浪人佐藤與茂七、赤垣傳藏、小汐田又之丞らが登場する。この、世界を忠臣藏にもつてきた理由を、從來は、書き下しに世界を決めることは當時の劇作法の內規で、忠臣藏は最も觀客に歡迎され、且安全な方法だつたからだとか、初演が「假名手本忠臣藏」と同時上演であつたから、その二番目として同じ忠臣藏の筋立てでいくことになつてゐたとか說明してゐる。事實、大詰の「蛇山庵室」は、季節の設定については問題はあるけれども、ともかく初秋——それも盂蘭盆の頃とおぼしい舞臺を、原作では雪にして「假名手本」の討入の場につながるやうにこしらへてある。しかし、忠臣藏が興行的に安全な方法であつたにしろ、それが盆興行の怨靈芝居と結びつくにはあまりにも理由が薄弱であるし、初演が「假名手本」と同時上演であつた

からといふ理由も、それではなぜ「假名手本」と同時上演をしたかといふ説明にはならない。

「假名手本忠臣藏」が書き下されたのは寛延元年（一七四八）で、八月大阪の竹本座の操に上演されてゐる。その年の十二月には歌舞妓にも移されて大阪で上場されてをり、江戸では翌二年二月に上場された。「四谷怪談」の作者南北が生まれる六年前のことである。江戸中村座、市村座のすぐ近くに生まれ、そこに育つた南北は、恐らく芝居好きであり、この「假名手本忠臣藏」も幼時から印象深い芝居として幾度か見てゐたことは想像に難くない。二十一、二歳の頃狂言作者を志した南北が、その最初に脚本の筆を執つたのは、作者生活の定法として「序開き」であつたが、それについて、

「序開き」といふのは、朝早く觀客も見てくれぬ頃に上演するごく短い狂言であるが、脚本枚數せいぜい十枚といふこの短い作の中に、大物である「假名手本忠臣藏」全十一段の眼目となる趣向はすべて織込んだといふものを書いて、その奇才に他の作者たちをして、驚異の眼を見張らせたといふ

といふやうな話が殘されてゐる。この、初めて書いた脚本に「假名手本忠臣藏」をとりあげたことは注目に値することである。

その後も、何本かの忠臣藏ものを書き、更に晩年に近い文政四年には「菊宴月白浪」といふ忠臣藏の芝居を書いてゐるが、南北が處女作以來、心に持ち續けてきた忠臣藏が、この作品を通過して四谷怪談へ發展していつたのだ。南北が一つの目標として持つてゐた「假名手本忠臣藏」といふ芝居が、後日、忠臣藏を世界とした四谷怪談を彼に書かせることになつたのではないだらうか。四谷怪談初演の折の「カタリ」に「（前略）女の筆のいろは假名いま流行の出雲が作へ不躾もお差圖ゆゑに書き添へし新狂言は歌舞伎の榮」とある。「いま流行の出雲が作」は竹田出雲の「假名手本忠臣藏」である。元來カタリは、まだろくに脚本も出來ぬうちから宣傳の意味で早く發表する習慣だつたので、どうしても舞臺に現れるのとは違つてゐたものであつた。このカタリも四谷怪談の内容とは少々ずれてゐる。出雲への不躾とことわつてゐるところに、はじめの意圖には「假名手本」に對する何かがあつたことを暗示してゐる。何か、そこに南北の忠臣藏に對する強い執着を感じるのである。なほ、「四谷怪談」は、南北が大部分を他の作者たちに書かせ、自分は一部（隱亡堀と三角屋敷だといふ）を執筆したに過ぎないといふ説もあるが、この場合の合作は、竹田出雲などの合作とは意味が違ひ、勿

論南北が中心となつてをり、全體の構想は南北が握つてゐた筈であるから、この作は南北の作と考へて話を進めたい。

さて、こゝで、四谷怪談のお岩と對立するもうひとつの筋、佐藤與茂七について考へてみよう。與茂七は、お岩と殆んどといつていい程、關係がない。血緣上の關係もないし、芝居の筋の上でも殆んど關係がみられない。僅かにお岩の義理の妹お袖を女房にしてゐることによつて、お岩との關係が見られるにすぎない。にもかゝはらず、相當この與茂七に力を入れて書かれてゐることを感ずるのである。このことについては折口先生が、

一體、此芝居は、存外お岩と關係のない、佐藤與茂七に力點が置かれてゐて、此が、お岩の筋と對立してゐる。又其側の出來ばえが、作品として、よくも出來てをり、所謂南北らしさを發揮もしてゐる。

と暗示してゐられる。（全集十八卷）

南北は、こゝで、もうひとつの忠臣藏を書かうとしたのではないだらうか。もちろん、主人公は與茂七である。この與茂七も、他に四谷怪談に出てくる鹽冶浪人赤垣傳藏も小汐田又之丞も、「假名手本忠臣藏」には討入以外には出てこないのである。さういふ、假名手本に落ちこぼれた、しかも講釋種や銘々傳風のものには名の通つてゐる幾人かの人たちを登場させて、別な忠臣藏を書かうとした。四谷怪談のおほよそ主人公と目されてゐる民谷伊右衞門は敵役（色惡）であるのに對し、この芝居で立役にあたるのは與茂七である。役柄の上からも、與茂七の筋が最初の構想ではむしろ中心であつたことを暗示してゐる。

立役といふ役柄は、

正義感の上に立つて行動し、弱者の難に遭ふのを救ひ、紛糾を重ねた人々の間を圓滿に斡旋する。敵役が惡をほしいまゝにすることによつて演劇を充分進展させた所で、立役が登場して、一切を正しくとり捌く。之は淨瑠璃以來の常套的な形式で、歌舞伎としても效果的にこの形式を活用させた。歌舞伎で斯ういふ役に「捌き役」といふ名稱を附したのは、また適切であつた。（戸板康二氏・わが歌舞伎）

これは、與茂七にも見られる役柄の性格である。敵役の伊右衞門たちの惡を整理してゆくのが與茂七であつて、大詰の幕切れにも伊

右衞門は與茂七によつて斬られてゐる。幕切れを與茂七でしめくゝつた形でもあるし、又最後のしめくゝりまで忠臣藏との緣を離れまいとしてゐる南北の意圖が感じられるのである。

「假名手本忠臣藏」を頭においてゐたとすれば、立役は、その由良之助に當る訣である。ただ、由良之助と與茂七では、すべての點で格が違うてゐる。佐藤與茂七は實錄では矢頭右衞門七である。右衞門七は微祿の士であつた。しかも年もずつと若い。「假名手本」でいへば、若衆の役柄である力彌に近い年頃であつた。南北が右衞門七である與茂七を取上げたのも、忠臣藏の力彌に對立して、同じ若衆としての與茂七を主人公に擬したのかもしれない。さういふ忠臣藏にはり合ふやうな野心的な意欲は充分うかがはれるのである。尤も、與茂七を立役に初めて取上げたのは南北であつた訣ではない。先行作品にも見られることで、例へば、四谷怪談よりは二十年ばかり前に書かれたといふ近松德三作「繪本忠臣藏」といふ脚本の增補「嫁切り」に立役として與茂七が出てきてゐる。そして、ここでは加藤與茂七となつてゐる。この「嫁切り」の脚本を江戸で上演した時、南北がこれを龜山の世界に書き直してゐる。「靈驗曾我籬」（れいげんそがのかみがき）がそれである。勿論、世界が龜山仇討であるから、與茂七の役は田邊文藏といふ名になつてゐる。南北が、與茂七の芝居の書き直しをしてゐるのは興味のあることで、これが文化六年であるから、「四谷怪談」を書く十六年前、南北が作者生活の脂がのりはじめる頃のことである。

元來、忠臣藏では、由良之助、力彌ほか、いはゆる義士をもつてあらはされる善に對して、斧九太夫、定九郎父子といふ惡の對立が見られる。同じやうに四谷怪談では、與茂七の善に對し伊右衞門といふ惡を鹽冶家中に作り出してゐるのである。南北は由良之助の「假名手本」に對して、この斧父子を主人公とした芝居を書いてゐる。前述の「菊宴月白浪」がそれである。この作品は、「假名手本」では山崎街道で勘平の二つ玉に殺される斧定九郎が主人公となつてゐる忠臣藏後日物語である。むしろ茶番ともいふべき芝居で、盜賊曉星五郎實は斧定九郎が、鹽冶判官の弟縫之助のために忠をつくすといふ變つた芝居である。由良之助と正面から取組む芝居では「假名手本」といふ當り狂言があるので、由良之助は避けて書いてゐるやうだ。四谷怪談では、與茂七といふ立役と伊右衞門といふ敵役の對立で書かうとしたのだ。伊右衞門は、鹽冶の家中でありながら、その御用金を盜んだ不忠の臣であつた。そして、この對立する筋が

もつと發展する筈の筋であつた。

もうひとり、お岩が死ぬと同じ時に伊右衞門に殺される小佛小平といふ役がある。小平は山東京傳の讀本以來、南北の「彩入御伽草」（いろゑいりおとぎざうし）にもあらはれる傳說の人物小幡小平次の名前だけの借用であるが、この男が、自分の主人の業病を癒すため、民谷家に傳はるソウキセイといふ藥を手に入れんとして失敗し、伊右衞門のため非業の死をとげる。しかも、お岩と不義の汚名をかけられ、戸板流しにされる。四幕目の佛孫兵衞（小平の父）内の場の上演を見ない現在では、殺される伊右衞門浪宅の場と、隱亡堀の戸板がへしに顏を出すだけの見せ場しかない。尤も、演出上は、お岩を勤める役者の早替りといふ興味につながれてゐるが、何のためにこの四谷怪談に登場するのか、殆んどわからなくなつてしまつたやうな人物である。この小平の主人といふのが小汐田又之丞で、上演を見ない孫兵衞内の場には登場する。小平の亡靈は、お岩のそれの影にかくれてしまつてゐる地味な存在だし、そして、何故小平を登場させねばならぬかも判然としないが、これは南北の腹案に、與茂七となひまぜに發展してゆく筈の、銘々傳的な小汐田又之丞の筋があつて、その筋だての展開のきつかけとして小平が出てくるのだと考へられる。ただ、その筋が育たなかつたため、小平の存在が中途半端に浮きあがつてしまつたのである。

怨靈忠臣藏の展開

立役である與茂七の部分が、力を入れて書かれてゐるのは、南北の構想からいつて當然のことであつた。ただ、立役の與茂七よりは敵役と女形に中心が移つてゐる。四谷怪談の忠臣藏の部分が發展せず、怪談要素がふくれあがつていつたのは、三代目菊五郎の注文も大いにものを言つたかもしれない。この菊五郎が太宰府參詣のため江戸を離れる、そのお名殘狂言が、先述の「假名手本忠臣藏」と「四谷怪談」の、二日間に亙つての上演であつた。これは、初代菊五郎も太宰府參詣の折に名殘として忠臣藏を演じてゐることに習うたのであらうが、菊五郎としては、「假名手本」と同時上演するならば、「假名手本」とは趣向の違つた怪談物を望んだことだらう。こ

の同時上演の趣向は、たとへば前述「彩入御伽草」といふ南北の作品にも見えてをり、初日小平次の芝居、後日（二日目）皿屋敷といふ風になつてゐる。ただ、二つの狂言を半分づつ二日に亙つて見せるといふのは珍しい例であらう。

この小平次の名が、小佛小平として四谷怪談に登場することは先述したが、その他にも南北の先行作品にあらはれた技法が、四谷怪談には集約された感がある。「阿國御前化粧鏡」（おくにごぜんけしやうかがみ）の阿國御前が嫉妬のため髪の毛が抜け、絞ると生血がしたたるといふ部分は、お岩の髪すきに通じるし、「謎帶一寸德兵衞」（なぞのおびちよつととくべえ）の大島團七といふ御家人の惡黨が、玉島兵太夫といふ侍を殺しておきながら、敵討の助太刀をすると僞つて、兵太夫の娘お梶を女房にし、後にお梶まで殺してしまふといふ筋や、「法懸松成田利劍」（けさかけまつなりたのりけん）で、與右衞門が累の父を殺しながら累と通じ、累の相好が醜く變るとこれをも殺してしまふところなどは、伊右衞門がお岩の父四谷左門を殺しながら、それをかくしてお岩を妻としてゐたり、直助權兵衞がお袖の夫與茂七（實際は奥田庄三郎）を殺しながら、その敵討の助太刀を餌にお袖を女房にする趣向と規を一にしてゐる。「菊宴月白浪」にもまた同じやうに、佛權兵衞がお輕の親與市兵衞を殺したといふぬれぎぬのはれるまで、お輕と假の夫婦になるといふ部分がある。「菊宴月白浪」は前に述べたやうに忠臣藏後日物語であるが、直助とか權兵衞といふ惡黨の名が出たり、定九郎の妻加古川が、直助に殺されて亡靈としてあらはれてきたりする。こゝで、忠臣藏に怨靈があらはれてくるのである。四谷怪談は、もちろんこの作品を通過してゐることは明らかだ。

大體、「假名手本忠臣藏」は怨靈に關係のない芝居である。しかし、萬斛の怨をのんで死んだ鹽冶判官の怨靈など、あらはれさうなものである。四段目で由良之助が九寸五分についた判官の血をなめることによつて判官の怨靈は由良之助にうつるのだ。淨瑠璃の方でも、

是を見よ方々と、亡君の御形見を抜き放し、此切先には我君の御血をあやし、御無念の魂を殘されし九寸五分、此刀にて師直が首かき切つて本意とげん

とあり、如何にも判官の怨靈があらはれて來る筋立てが展けさうである。ただ「假名手本」の場合は實錄があまり有名なので、怨靈を

出す筋にもならなかつたのであらう。六段目に切腹した勘平の魂魄も、怨を晴らすまでは義士たちのまはりを浮動しさうだ。勘平がまさに落入らんとする際のせりふ、

佛果とは穢らはしい。死なぬ〳〵、死にませぬ。魂魄この土に留まつて、敵討のお供せいで置かうか。

苦しい息の下から、敵を討たずにこの世を去ることに對するせい一杯の恨と未練がほとばしり出る。このまゝで勘平が滿足してあの世へ行くとは考へられない。フォクロリックな見方からいへば、人生には、一つの、運命的にこの世で果さねばならぬことが決つてゐて、それを果さなかつたことが、魂の平安を得るのに邪魔になつた。勘平の場合も、敵討がこの世で果されなかつた。勘平の怨靈はこの土に留まつて、敵を討つまでは滿足できなかつたのだ。その怨靈を滿足させるために、「財布の燒香」といふ演出がある。「假名手本」では、大詰討入の場に、いよいよ敵の師直の首を討取り、亡君の位牌への燒香に、まづ一番槍をつけた矢間十太郎が燒香し、

二番目は由良殿、いざお立ちとすすむれば、いやまだ外に燒香の致し手あり。そりや何者誰人と、とへば大星懷中より碁盤稿の財布取出し、是が忠臣二番目の燒香、早野勘平がなれの果、其身は不義の誤りから一味同心も叶はず、せめては石碑の連中にと女房賣つて金調へ、其金故に舅は討たれ金は戻され、詮方なく腹切つて相果てし、其時の勘平が心、さぞ無念にあらう、口惜しからう。金戻したは由良之助が一生の誤り。ふびんな最後を遂げさしたと、片時忘れず肌放さず、今宵夜討も財布と同道、平右衞門、そちが爲には妹聟、燒香させよと投げやれば、ハ、、、、はつと押戴き〳〵、草葉のかげよりさぞ有がたう存じましよ。冥加に餘る仕合せと、財布を香爐の上に着せ、二番の燒香早野勘平重氏と、高らかに呼ばはりし、聲も涙に震はすれば、列座の人も殘念の胸もはりさくばかりなり。

原作にはこのやうな場面が設けられてゐた。大詰でこれだけのことをしておかなければ、六段目の勘平の怨靈は浮ばれなかつたのである。歌舞妓の方では大詰の討入が自由に書きかへられてゐるので、この演出は殆んど行はれないが、その財布の燒香に勘平があらはれるといふ演出もあつたさうである。勘平の怨靈は充分活躍しさうであつたが、實錄が近すぎることがそれをはばんだのである。そして僅かに大詰に財布の燒香で、勘平の怨靈を滿足させたのであつた。このやうに忠臣藏は充分に怨靈芝居として育ちさうであつた。怨靈

忠臣藏である。しかし、怨靈は出なかつた。南北のねらつた忠臣藏は、この怨靈忠臣藏のやうなものではなかつたか。それが、お岩や小平といふ世話の怨靈の筋に大きく變つていつたのだつた。

四谷怪談の芝居は、その後、外題を變へ、内容を變へて上演されてゆく。「增補四谷怪談」といふ脚本は、四谷怪談の間に義士銘々傳を入れてやつたといふが、脚本が現存しない。しかし、かういふ脚本が當然あつてもよい筈である。ともかく、四谷怪談における忠臣藏は、遂に熟さずにしまつた。

お岩の怨靈

かうして、四谷怪談に出る怨靈は忠臣藏に關係のある怨靈ではなかつたが、お岩の怨靈にしても、やつぱり敵討の怨靈であつたことは、あまり問題にされてゐない。南北は、お岩が怨靈として浮動するその理由を、脚本の中に用意はしてゐたのであつた。

序幕の淺草田圃で、鹽冶浪人民谷伊右衛門は、舊惡を握られてゐる舅四谷左門（お岩の父）を闇討にした。同じ時、同じ場所で、直助權兵衛は戀の遺恨からお袖の夫佐藤與茂七を殺す。實は人違ひをして舊主の奥田庄三郎を殺したのである。お岩、お袖の姉妹が、父と夫を失つて泣き悲しむのを、伊右衛門と直助は、だまして親切ごかしに敵討の助力を約す。以上が序幕の一部のあら筋であるが、この部分は、四谷怪談の大事な發端である。

そして、つぎの二幕目伊右衛門浪宅の場でお岩が死ぬのである。產後の肥立の悪いお岩が、隣家の伊藤喜兵衛（高師直の家臣といふことになつてゐる）からおくられた血の道の藥をのんで、忽ち相好かはつて醜惡な女になる。喜兵衛の孫娘お梅が伊右衛門に思ひをかけてをり、その望みをかなへてやるため毒藥をおくつたのを、お岩はそれと知らずに飲んだのである。慾に眼のくらんだ伊右衛門はお岩を邪慳に扱ひ、お梅を妻に迎へやうとする。その伊右衛門の變心を按摩の宅悦から知らされたお岩は、柱にさゝつた小佛小平の刀であやまつてのどを突き、恨み死にに死んでゆく。

お岩の怨靈は、このあと浮動する。「戒名つけても俗名の、やつぱりお岩と記し置くは、世上の人の回向なと、受けたらよもや浮まうと、後の祭も怖さが一倍……」蛇山庵室で伊右衛門が獨白するやうに、卒塔婆も流れ灌頂にして、少しでも多くの人の回向をうけさせ、何とか怨靈を浮ばせやうとするのである。しかし、お岩の怨靈はいつまでも執念深く伊右衛門を惱ましてゆく。一體、お岩は何に執念をのこし、伊右衛門にたゝるのか、そこにまづひとつの問題がある。

まづ、伊右衛門に心變りをさせた、隣家の娘であるお梅に對するお岩の嫉妬が考へられる。怨靈のたゝりのひとつの形として、源氏物語の六條御息所以來、文學の上にもあらはれてくる怨靈である。六條御息所が生靈として葵の上をとり殺し、死靈となつては紫の上をとり殺す。變心した相手の男にとりつかずに、變心させた女にたたつてゆくのである。現世におけるうはなりうちといふ、前妻の後妻に對する怒りの表現が、あの世の女がこの世の女にたたる形としてあらはれる。この場合の怨靈は、相手の男伊右衛門にはとりつかず、二度目の妻お梅にとりつくのであつて、お岩のうはなりねたみの形である。お梅との夫婦のちぎりの床に、お梅の顏が不意にお岩に變り、伊右衛門はその首をはねてしまふ。心靜まつてみれば、それはお梅の首であつた。かうして、お岩はお梅を殺してしまふ。お岩の怨靈が、もしお梅に對する嫉妬によるものであれば、お梅に對するうはなりうちは忽ち解決し、こゝで怨靈は浮ばれる筈である。しかし、實際には、その後にむしろお岩は伊右衛門にたたるのである。さうすると、お岩の怨靈が嫉妬からたゝるとは考へられない。

それでは、お岩は、伊右衛門に邪慳に扱はれたといふことを怨に、その執念がのこつたのであらうか。これとても、あれほどくりかへし〳〵伊右衛門にたたる程の理由になりさうもない。嫉妬や、邪慳な扱ひに對する執念とは考へられないのである。普通、お岩は伊右衛門にいぢめられ、殺されたからその執念がのこつたと考へてゐるやうである。しかし、お岩は決して伊右衛門に殺されてはゐないのである。尤も、殺されたも同然の印象をうけることは確かである。しかし、細かく考へてみると、お岩に相好の變るやうな毒藥をのませたのは伊藤喜兵衛であり、お岩を死に導く直接動機となつたと考へられてゐる伊右衛門の變心、それをお岩に告げ知らせたのは按摩の宅悦であり、お岩が實際に死んだのは、柱にさゝつた小平の刀によつてである。從つてお岩の横死は、直接伊右衛門に關係はないし、伊右衛門が手を下した訣でもない。それでゐて、すること爲すことお岩の怨靈にさまたげられ、邪魔をされて、伊右衛門は狂はん

ばかりに苦しむ。その苦惱が、邪慳に扱はれたお岩の怨の報いであるとすれば、お岩の執念はそれで晴れさうなものであるが、まだまだ執念はのこつてゆく。それは何故であらうか。

そこで、この芝居の發端である序幕が問題になつてくる。伊右衞門はお岩の父四谷左門を殺してゐるのである。とどめをさしたところへ人の氣配、伊右衞門はいそいで姿を隱す。現れたのがお岩で、父の歸りがおそいのを案じて迎へに來たのであつた。左門の死骸に氣がつき、とりすがつて泣く。

お岩　もうし、ととさんいな〳〵。氣をたしかにもつて下さんせ。かたきは何ものでござんす。コレイナア、物言うて下さんせいなア。

などと、泣き落すところへ、伊右衞門がわざとばた〳〵と足音させてかけ來り、

伊右　夜陰に何やら女のなきごゑ。ヤア、わりや女房お岩ぢやないか。

お岩　ヤア、おまへは伊右衞門どの。ととさんが殺されてゐますわいナ。

伊右　ヤヽ、こりや舅どのを何者が。エヽコレ、今ひとあしはやくば、何おめ〳〵とはうたせまいものを。エヽ、殘念千萬な。

と白ばくれる。そして、親の敵を討つ助太刀を約束して、とう〳〵その場をごまかしてしまふ。

現在の夫がまさか親の敵とは、お岩もつゆ知らないで、共に暮らすのである。そして、死ぬまでその事だけは知らずに死んでしまつたのである。お岩の怨靈はのこつた。お岩の怨靈は實に親の敵を討つことができなかつた執念であつたのだ。親の敵が目の前にゐることも知らずに、遂に敵を討つこともなく、しかも、その親の敵に直接殺されたでないにしても、お岩の非業の横死はむしろ敵のため返り討になつてゐる形にさへなつてゐる。その執念はおそろしいものであつた。お岩が、父左門の死骸にとりすがつたとき「かたきは何ものでござんす」とすぐに聞いてゐる。左門に息があつたなら、こゝで伊右衞門の名が出てしまふところであつたが、不幸、敵の名は聞けなかつた。しかし、父にとりすがつてすぐに敵の名を聞くところに、當時の、親の敵に對する考へ方が窺はれるのであつて、お岩の氣持としてはその後も親の敵を討つことを一時も忘れてはゐなかつた筈だ。それが、晴れて敵も討たずに死んでいつたのであつた。

お岩の怨靈は、親の敵伊右衛門にたゝつてゆく。お岩の伊右衛門への執念には、お岩自身の意志でなく、何かさうせずにはゐられないやうな執念ぶかいものがみえるのである。

大詰の幕切れに、伊右衛門は與茂七に討たれてゐる。「女房お袖が義理ある姉、お岩が敵の其方ゆゑ、この與茂七が助太刀して」とあり、與茂七は助太刀であつて、敵討をするのはお岩なのである。こゝでの與茂七の助太刀は、直接にはお袖の助太刀といふ意味であるが、伊右衛門はお袖にとつても親の敵であつた。「お岩が敵の其方ゆゑ」の、お岩の敵といふことには、お岩の親の敵の意味も含まれてゐた筈である。だから、お岩はこゝでは鼠となつて伊右衛門の白刃にまとひつき、與茂七の一太刀で敵討はめでたく成就するのである。これは、お岩の敵を與茂七が討つたのではなかつた。もしさうであれば、そこにお岩が出てくる訣がないのであつて、かうしてお岩が親の敵を討つことによつて、お岩が浮ばれ、この芝居が完結するのである。

お岩が、親の敵を討つためには、伊右衛門にとりついてこれを殺すことが、目的の成就であつた。しかし、すぐには伊右衛門を殺してゐない。いつまでも執念深くたゝつて伊右衛門を苦しめてゐる。勿論、すぐに殺してしまつては、芝居がそれで終つてしまつて脚本として成立たないし、觀客も納得しないといふことが、その理由であるに違ひない。しかし、普通日本の敵討に關する物語は、長い年月を、あらゆる辛酸をなめて苦勞した上で目的を達してゐる。四谷左門が殺されたといふことは、けがれであつた。フォクロリックな考へ方からいへば、血を出したといふことがけがれなのである。だから、その親族にかゝつてくるけがれは贖罪せねばならぬ。それが敵討なのである。當の敵は簡單には敵を討たれてはしまはない。それは、討つ方が苦しまなければ贖罪にならなかつたからである。敵を討果すことにより贖罪するのは、本人自身の贖罪だから骨が折れるわけなのである。お岩の怨靈にしても、戀の恨だけの怨靈ならば、お梅を殺してそれですむことだし、第一、伊右衛門はその場合問題にならない。お岩が伊右衛門を苦しめ、執念深く、これでもか〳〵とたゝるのは、同時にお岩にとつてもなか〳〵敵が討てない極度の苦しみを經驗してゐるのである。お岩の肉體は死んでゐるが、靈魂はあの世へはまだ行つてゐない。この世で果すべき敵討を果さなかつたから、怨靈は平安を得てはゐないこと、さきの勘平の場合と同じことだつたのである。魂はこの世に遺つて親の敵を討つまでは苦しみに苦しみぬく。この世に肉體を持たぬお岩は、鼠の體を借

りて伊右衛門やその縁者たちにとりついていつた。「これも大かた子年生まれのお岩が執念」と伊右衛門は歎いてゐる。苦しみぬいた果てに、お岩は伊右衛門を討果したのである。こゝで、お岩は浮ばれた。お岩が浮ばれなければ、觀客も浮ばれない。横死者の怨靈が最後には成佛するところまで見屆けなければ、觀客も安心はできなかつたらう。敵討も成つて、お岩も成佛した。その怨靈はあの世へ歸つたのである。觀客もほつとしたに違ひない。四谷怪談は、文政八年七月、お盆の興行であつたのだ。

南北と四谷怪談

さういふ盆といふ季節感もだん〳〵薄れてきてゐる。折口先生は、「(脚本では、伊右衛門浪宅の)外は、もう大して夏の生活を活してゐない。盂蘭盆でありさうな隱亡堀も蛇山庵室も別にさういふ風には見えぬ」と書いてゐられる。(全集十八卷)

大詰、蛇山庵室は作者の氣持としては盆であらう。ただ、世界が忠臣藏であることと、初演が「假名手本」と同時上演であつたため、討入へ接續する關係上雪降りの場面にしてゐた。それを今日の如く、盂蘭盆の季節としたのは天保二年八月市村座の、江戸での三度目の上演の折だといふ。それ以來、それまで流れ灌頂から出たお岩の亡靈が、盆提灯から拔け出るやうに改められたといふことである。蛇山の、高燈籠がはりの白張り提灯が吊つてある現在の舞臺は、もう明らかに盆である。つまり、お岩の新盆になる訣である。その一つ前の夢の場は、蛇山庵室で伊右衛門が見た夢といふことで蛇山とつながりを持つてゐるが、この場が七夕であることは指定されてゐるから明らかだ。從つて隱亡堀の場は、それ以前か、或は盆に近い頃であることは想像される。その隱亡堀の場で、今はおちぶれて非人となつてゐる伊藤家の妻お弓に問はれて、直助權兵衛が「伊右衛門が死んで四十九日」と欺いてゐる。伊右衛門が死んだといふことは欺くことができるにしても、この四十九日といふ日數は口から出まかせではお弓を納得させることができない筈である。從つて、伊藤喜兵衛、お梅が殺され、お岩が死んだあの伊右衛門浪宅の夜から、隱亡堀の場までは少くとも四十九日以上は經つてゐることになる。かうして逆算してゆくと、お岩の横死したあの夜は、五月も初めの頃といふ想像が成立つのである。四谷あたりの路次裏の、

おちぶれた浪人の住む家の、五月の夜である。舊暦の五月初めといへば、今の六月も中旬を過ぎ、下旬に近い頃だ。お岩も、赤子が蚊にくはれることを氣にしてゐるが、おそらくおびただしい蚊が出てくる頃であらう。それだけに、お岩の生爪をはがしてまでも蚊帳を持ち去る伊右衞門の殘酷さと、あとにのこされたお岩のあはれさがひとしほ感じられるのである。かういふ、江戸の町中のうらぶれた家と、蒸暑いいやな季節を背景に、お岩の凄慘さをひときは印象的に、南北はゑがき出したのであつた。

この五月といふ月はものいみの月であつた。田の行事の行はれるこの月は謹愼の生活をおくる月だつたのである。そして、そんなことから、何か怨靈信仰と結びつきやすい、たださへこはい月であつたのである。お岩といふ、若くして横死した靈魂は、怨靈として怖れられるのに充分な資格を持つてゐた。そして、その横死したのが五月のことであつたとすれば、お岩の怨靈は伊右衞門を怖れさせる以上に觀客をも怖れさせたことであらう。

作品として四谷怪談は優れてゐるといふことも言へるだらうし、また、その初演以來加へられた演出上の工夫や、役者たちの如何にしてお岩の亡靈を恐ろしく見せるかといふ努力、これも四谷怪談が大當りをとつた原因であつたけれども、もうひとつ、かういふ作品を生み、育て、共感を感じ、實感をもつて迎へた背後の觀客の生活といふものが、「四谷怪談」が人氣を保つてきた大きな原因であつたに違ひない。盆興行としての四谷怪談は、民衆の生活そのものでもあつたのである。

新しい、もうひとつの忠臣藏になる筈であつた「四谷怪談」は、かうして忠臣藏からそれて、お岩といふ怖ろしい怨靈の芝居になつていつた。實力ある作者が、現實の舞臺や俳優を考へながら書いてゆく時、筋がそれてゆくのは當然なことで、それが、作者の腕の未熟だとか、構成力の弱さだとか難ずるのは當らない。たとへば、「假名手本忠臣藏」にしても、最初とり入れようとした水滸傳の趣向さへもむなしく消え去つて、わき筋といふべき本藏傳や勘平傳が大きくふくれあがつていつたといふことを池田彌三郎先生が指摘されてゐる。(「藝能」兜の數は四十七)

「四谷怪談」が、もうひとつの忠臣藏の筋からそれていつたとしても、南北の力の不足では勿論なかつた。むしろ、民衆の生活の底流にある信仰生活をふまへて、あれだけの怨靈芝居を書き上げた南北の手腕は、やはり非凡のものといふべきである。